

親鸞はインドに発祥し、中国から朝鮮半島を経て日本に流伝してきた仏教に、浄土教の祖師やその文献を通して遇うことができた慶びを述べている。これらの文献は、中国から将来した漢文という他国の言語によって記されたものであった。そのため漢文を読むための方法として文体はそのままにして、そこに返り点や送り仮名などを付すことによって日本語の語順で読解する「訓読」が用いられた。

本発表では、漢文を親鸞がどのように訓読したのか、その特性を、親鸞にとってインド・中国・日本の三朝浄土の大師等が入るよう勧めた、正定聚から考えることとする。

親鸞における漢文訓読の特性を表す文として、しばしば『無量寿経』第十八願成就文の「至心回向」が取り上げられる。この訓読について強引で自由であると評価をされることがある。原典では衆生が「至心に回向して」と訓読するところを、親鸞は「至心に回向したまへり」と読み替えを行っているからである。親鸞の意図は、阿弥陀仏の本願力回向を顕すことにある。それと同時に煩惱具足の衆生には無始より今日今時に至るまで真実心も清浄心もないことを示すこととなる。善導が『観経』の至誠心を真実心と解釈して、「不得外現賢善精進之相内懷虚仮」と説示した文を、親鸞は如来が真実心のうちに成就したものを須いて、「外に賢善精進の相を現ずることを得ざれ、内に虚仮を懐いて」と訓読している。本来は衆生が須く真実心をなして、「外に賢善精進の相を現じ、内に虚仮を懐くことを得ざれ」と訓読すべき文である。そこには「いずれの行もおよびがたき身」である親鸞が「非僧非俗」を宣言し、「愚禿積親鸞」と称した生き方と重なる。

さて、親鸞は法然との出遇いによって、これまで全く経験したことのない大般涅槃の世界に心が開かれた。この経験を第十八願成就文に探り当てた思索が信一念積である。「即得往生」については、正定聚の位に定まると解釈するところに特色がある。この思想は第十一願成就文の「生彼国者」を、「彼の国に生るれば」と読むべきところを、「かのくににむまれむとするものは」と読み替えていることや、『如来会』第十一願成就文を「もしまさに生れむ者」と訓読していることから見ることができる。

また『愚禿鈔』には、真実浄信心を内因とし、摂取不捨を外縁として、「信受本願前念命終 即得往生後念即生」と述べている。すなわち、「真実信心の行人は、摂取不捨のゆへに」正定聚が現生に成立するということができる。「信受本願前念命終」には曇鸞『往生論註』の「即入正定聚之数」を、「即得往生後念即生」には龍樹『十住毘婆沙論』の「即時入必定」「名必定菩薩也」を細註として施している。

龍樹の『十住毘婆沙論』「地相品」では「必定」を念ずる行と示しているところを、親鸞は「必定して」と訓読し、「必定の諸の菩薩」を「念必定の諸の菩薩」と読んでいる。「易行品」では、百七仏の名を称し憶念することを述べているが、親鸞は諸仏が阿弥陀仏の名を称え、本願を憶念するとしている。また曇鸞の『往生論註』妙声功德積の「剋念して生ぜむと願ずれば、亦往生を得て、即ち正定聚に入る」という文を、親鸞は「剋念して生れんと願ぜむものと、亦往生を得るものとは、即ち正定聚に入る」と訓読している。これらの読み替えによって、現生正定聚思想を成立させている。

さらに、親鸞は煩惱成就の凡夫が真実証である滅度に必ず至ることができるのは、大乘正定聚の数に入るからであり、それが成立するのは「往相回向の心行を獲」ているからである。そして往相ばかりではなく、還相も含めた二種回向によって正定聚が成立することも示している。

このように親鸞は、読み替えを駆使して正定聚を示しているが、それはそうであるとしか訓読できなかつたからであろう。そして漢文であったからこそ、教義を構築させることが可能であったと考える。

キーワード 「読み替え」「回向」「摂取不捨」